



審査員講評



【絵画部門】

講評:酒井 昌之 氏(一水会常任委員、県展運営委員)

◆市長賞 『 41. 秋麗 』金澤 政子 さん

秋景の自然の豊かな色彩を整理して中景の岩と紅葉を生かした構図で描かれています。近景の観察表現が澄んだ空気感まで表現しています。水面の青緑の色彩が紅葉の色彩を生々とさせています。難しい硬い岩の表現は明るくて紅葉に良く調和しています。

◆教育長賞 『 22. 鏡山遠景 』佐藤 憲一郎 さん

広い自然の中の空間や水の表現に秀でた描写力が発揮された作品です。色彩の性格や距離感を使い奥行きのある表現に秀でた作品です。風景画の近景から遠景まで整理されて明解に表現されています。

◆教育長賞 『 23. 旬 』上妻 静枝 さん

品格のある落ち着いた色彩の組み合わせで、魚の表現が秀でています。構成構図の工夫が生かされて変化動きのバランスを取り、効果を大きくしています。表現のねらいが、はっきりとしており、確かな力量を感じる見応えがある作品です。

◆教育長賞 『 42. 新世界 』古賀 舜也 さん

イメージの新鮮さの中に作者の豊かな心象を感じさせる作品です。主題の細かい描写と背景の組み合わせが冒険的で、絵に活力を与え、絵の中で挑戦して描かれています。奥行きのある街の建物表現は組み合わせの工夫があって魅力を感じます。迫力ある空想を楽しめる作品です。

《 総 評 》

全般的にレベルアップを感じました。予想以上に強い意欲を感じる作品が多くありました。類型的な作品から新しい感性、意欲ある作品が増えてきました。テーマを見出し、どのように描くかを楽しむことも大切です。

惜しくも賞を逃した作品の中にも素晴らしい作品が多くありました。若い高校生の新鮮な画風を見て、多様な刺激を受け、制作の楽しみを深められることを期待できました。自分の可能性を信じ、益々のご精進を期待いたします。

【彫塑工芸部門】

講評:近藤 学 氏(現代工芸美術家協会理事)

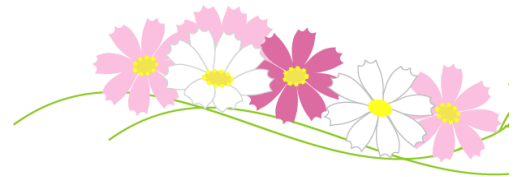
《 総 評 》

美術展における彫塑・工芸部門は、高い技術と感性を融合させての制作になり時間と経験が必要になるため全国的に出品数が減少しています。

68回の歴史を持つ白河市美術展も出品数の減少が如実で危機感を感じております。

今回の出品作は、少数でしたが伝統技法を踏襲した作品や楽しい作品があり今後に繋がるものと期待いたしております。

白河市美術展が身近な美術展として多くの皆さんが出品されることを願っております。



【書部門】

講評:遠藤 昌弘氏(日展会友)

◆市長賞 『 10. (臨)針切 』 小湊 梨々花 さん

2尺8尺縦額装、薄朱色染紙、一部ぼかし、金銀砂子加工料紙。仮名の著名な古典である『針切』の臨書作品。『針切』から六十首ほどを選び、2尺8尺の紙を7段にして作品にした。『針切』はその名の通り“針で書いたような線”が特徴で、その繊細さ優美さが見どころである。本作品は、そうした『針切』の特徴をよく観察し、表現した。細い線は弱くなりがちであるが、強さとしなやかさを駆使した運筆は見事である。また書き始めから最後の落款にいたるまで緊張が途切れず、よく集中できたことも作者の力量といえよう。日ごろの鍛錬が背景にあることは、作品が雄弁に語っている。今回の最優秀作品とし、次回作に期待したい。

◆教育長賞 『 12. (臨)傳山 』 小松 勝苑 さん

2尺6尺縦額装、行草書。傳山(ふざん)は中国明朝末から清朝にかけて活躍した人物である。多くの書例を残しているが、とくに文字を続け書きする連綿の行草書に見るべきものが多い。本作は、傳山の行草書作品の臨書である。臨書は、学書のために欠かせないものであるが、それを自分のものにして表現に結び付ければ、“ものまね”を脱却して自己表現になる。本作は、傳山の行草書作品の特徴をよくとらえ、自分のものとして表現している。2尺6尺という紙面を十分に活かした構成力も秀逸である。傳山のもつ生命感、線の充実さを自己のものとした、その真摯で熱心な態度も評価したい。

《 総 評 》

一般の部は、漢字書・仮名書があり、また創作・臨書があつて、それぞれに表現を持った内容であった。この中でも、臨書作品に比較的佳作が見られた。多数が額または軸作品であるが帖作品もあつて多様な表装を見ることができた。漢字書は、臨書・創作ともあつたが、臨書は安定した作品表現になっていた。創作では文字の点画や運筆に疑問の残るものが一部に見られた、ぜひ制作にあたっては身近な先生や先輩にアドバイスを受けてほしい。仮名書は、細字・大字とも古典をふまえて好ましいものも多く見られた。

高校の部は、全作品が臨書で、いずれの作品もレベルは高い。その差は僅かといえるが、古典に対する熱心さが作品にも表れているように感じた。また2尺8尺の大作に挑戦するものもあることは、頼もしい限りである。

書の作品は古典の習得であり、また対決でもある。自己満足に墮することなく、つねに格調の高さを目指すものであってほしい。

【写真部門】

講評：丹野 清志氏(写真家)

◆市長賞 『19. 水面のワルツ』郷田 満洲枝 さん

ハッと目を引きつけられて、それからしばらく見つめていると、郷田さんはタイトルにワルツとつけていますが、静かに音が響いてくるのを感じたのです。ハスの花を撮るというより、ハスの花咲く場において、心に響くリズムを写真化している。そのことがこの作品の魅力です。郷田さんにとって、ハスの花は、植物と向き合っただけでリズムを感じる素材なのですね。シンプルな画面構成が、静謐な水面に心地よい音を奏でていきます。音はかたちでは写りませんが、見えないものを感じることはできるのです。「自然のリズム」は、郷田さんのライフワークになっていくのかな、と思います。

◆教育長賞 『13. 電線の走る街』畠山 真一 さん

写真的に見れば、逆光に光る電線の輝きが美しくとらえられている、という見方になると思います。この光を発見して、畠山さんはどきどきわくわくしつつシャッターを切ったのではないかと想像します。光がやさしく街を包み込んでいて、人のぬくもりをも感じさせてくれる作品です。私が強く感じたのは、光の美しさより、家並みにひろがる人びとの暮らしが想像できることでした。畠山さんが表現したかった主題は、「街」だったのだと思います。生活の場である街を、暮らしを、人びとを、畠山さんのまなざしがとらえていく世界を期待しています。ありふれた街の中に、写真でとらえることによって見えてくる世界を発見し続けてください。

《 総 評 》

今年は作品がやや少なかったのですが、それぞれの意図を的確に表現していて見ごたえがありました。1点1点感想を述べることができるといいのですがスペースに限りがあるので残念です。全体を見て思うことは、ただ1つ、もっと自由に撮っていいのではないかということです。こう撮らなければ作品にならない、こういう被写体を選ばなければダメだというようなキメ事などいっさい無いのにそういう型にはめ込んで撮っているのではないのでしょうか。こういうケツサクが欲しい、と言葉で言うと「傑作」が作られる画像生成 AI の時代、ケツサクねらってもしょうがない。人間が撮る写真、それは写真の原点でもある「記録」だと思うのです。それぞれの生活の場、街、人々、自然といった環境を生活者の視線で見つめることをぜひおすすめしたいのです。コンピュータ画像に使われずに、人間の眼で見る、それが「写真」なのですから。

